

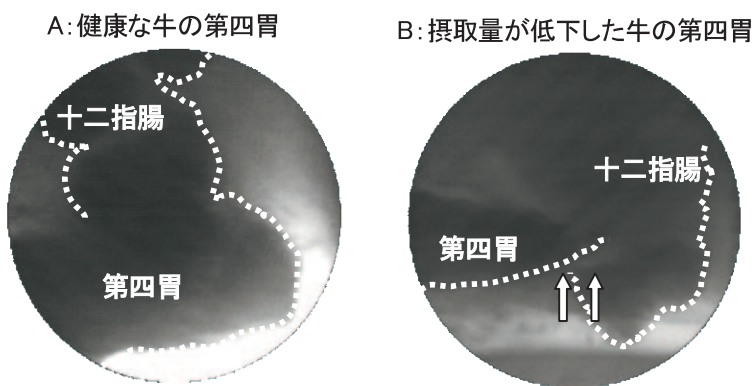
Topics

乳牛の第四胃変位の低減対策

乳牛の第四胃変位は、分娩後の飼料摂取量が低い牛で多く認められます。そのため、分娩牛の摂取量確保が本症低減の最大のポイントです。そこで、摂取量不足改善のため、本症多発農家において以下の対策を試みたところ、発症率が低下しました。

- ①泌乳中後期の過肥防止：泌乳中後期以降のBCS3.25以上の牛への栄養価を下げた飼料の給与
- ②分娩前の繊維増給：分娩前の牛への乾草など腹持ちの良い繊維質飼料の多給
- ③分娩後の飼料中第一胃内消化デンプン含量の調整：第一胃内消化デンプン20%未満の飼料の給与
- ④経産牛へのCa剤投与：分娩直後の血中Ca濃度が7.0mg/dl未満の経産牛へのCa剤の投与

個々の農家において分娩牛の摂取量低下の要因を見つけ出し改善することで、本症の発症を低減できます。



乳牛のX線写真

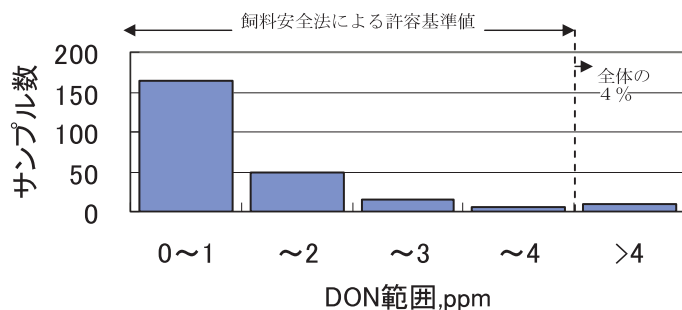
摂取量が低下すると、内容物の減少により第四胃が浮くため変位しやすくなります

対策前後の第四胃変位発症率 (%)

| | 対策前 | 対策後 |
|------------------------|------|-------|
| 泌乳中後期の過肥防止 | 12.5 | → 4.8 |
| 分娩前の繊維増給 | 30.8 | → 8.3 |
| 分娩後の飼料中第一胃内消化デンプン含量の調整 | 20.0 | → 4.9 |
| 経産牛へのCa剤投与 | 14.0 | → 4.8 |

とうもろこしサイレージのカビ毒実態と対応

サイレージ中での汚染が懸念されているカビ毒のうちデオキシニバレノール (DON) について、飼料用とうもろこしにおける汚染実態を調べました。とうもろこしサイレージにおけるDON濃度は平均1.18ppm(n=245)で、4ppmを超えるものの割合(飼料安全法における許容基準以上)が4%ありました。汚染は主に圃場立毛中に*Fusarium graminearum*により植物体全体で起こり、倒伏によりDON濃度が高まる危険性があることを明らかにしました。ただし、許容値以下のDON含有飼料では乳量への影響はみられませんでした。また、これまでの調査ではカビ毒の中で最も毒性が強いアフラトキシンは検出されていません。カビ毒に対して冷静な対応が必要です。



とうもろこしサイレージ中 DON 濃度の頻度分布



カビに汚染された子実